

沖縄島北部における観光利用の現況と課題  
(現時点修正版)

## 目次

1. 観光利用の現状把握.....	1
1-1 観光入込及び宿泊の状況.....	1
1-2 アンケート調査からみた来訪者の意識等.....	8
1-3 受入体制の現状.....	11
2. 沖縄観光の動向と世界遺産登録後の変化予測.....	15
2-1 観光入込客数の変化予測.....	15
2-2 利用者ニーズ及び利用形態の変化予測.....	15
3. 観光・エコツーリズム等の主な施設整備状況と計画.....	17
4. 世界遺産推薦地管理計画における観光・エコツーリズム.....	21
5. 拠点整備構想検討上の課題.....	26
5-1 利用形態・特性からみた課題.....	26
5-2 利用者ニーズからみた課題.....	28
5-3 世界自然遺産の保全・管理の観点からみた課題.....	29
参考：アンケート調査票.....	30

# 1. 観光利用の現状把握

## 1-1 観光入込及び宿泊の状況

### 1-1-1 3村全体の概要

既存データ及びアンケート調査結果からみた沖縄島北部 3 村全体への日本人観光客の入込及び宿泊の状況は、以下のように整理される（調査結果及び分析結果の詳細は「参考資料 1」参照）。

沖縄島北部 3 村への県外からの日本人観光客数は、沖縄県観光統計実態調査の北部 3 村への訪問率から平成 27 年で約 52 万人と推計され、近年、増加傾向にあったが平成 27 年は減少に転じている。

表 1 沖縄島北部地域の観光入込客数の経年変化（推計）

年次	沖縄県の観光客数※1	沖縄島北部 3 村の訪問率※2	沖縄島北部地域の推計観光客数
	(A)	(B)	(A)×(B)
H21	5,650,800	5.8%	327,746
H22	5,855,100	7.8%	456,698
H23	5,415,500	7.8%	422,409
H24	5,835,800	8.4%	490,207
H25	6,413,700	8.2%	525,923
H26	7,058,300	8.4%	592,897
H27	7,763,000	6.7%	520,121

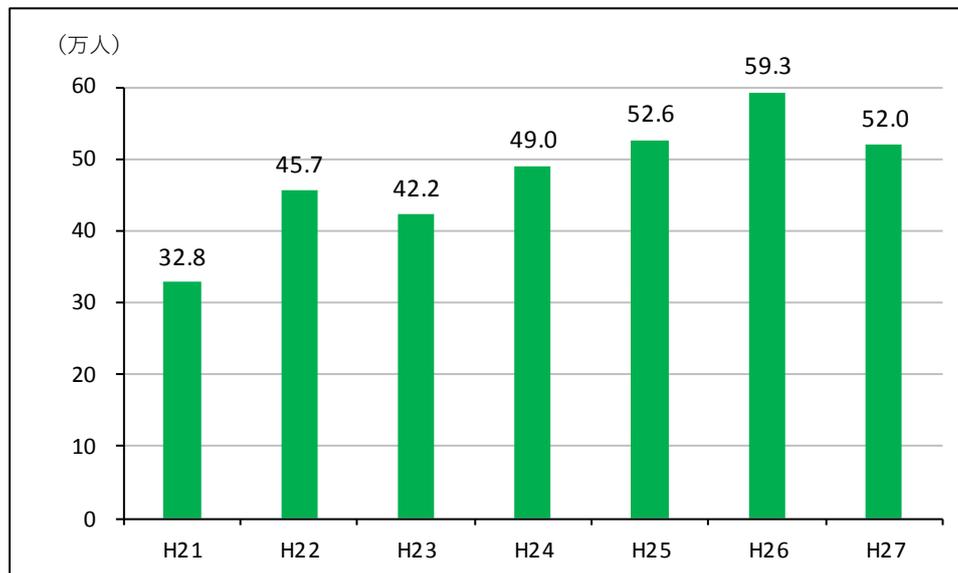


図 1 沖縄島北部地域の観光入込客数の経年変化（推計）

出典：※1：沖縄県観光要覧

※2：沖縄県観光統計実態調査

一方、沖縄島北部 3 村への県内観光客数については、本業務のアンケート調査における県内・県内客の割合（県内 52.9%、県外 47.1%）から、平成 27 年で約 58 万人と推計され、3 村全体の日本人の観光入込客の総数は約 110 万人と推計された。そのうち宿泊客数は、3 村全体で約 21 万人（現在調査中の東村一般観光客数を除く）と推定され、3 村全体での日本人観光客の宿泊率は 37.3%程度となり、宿泊者の半数は、宿泊施設が比較的多い国頭村内で宿泊しているものと考えられる。

また、本調査結果では沖縄島北部地域への外国人の観光入込状況については、推定できるデータは得られなかったが、空路利用の外国人観光客（546,500人/H27）の7.6%程度（日本人の県外観光客の北部3村来訪率の過去7年間の平均と同程度）と仮定すれば、年間4万人程度の外国人観光客が3村を訪れていることとなり、3村全体の観光入込客の総数は約114万人/年程度と推定された。

表2 沖縄島北部地域の観光入込及び宿泊の状況

地区	入込客数 <sup>※1</sup> （日本人：推計）			宿泊客数（各村調べ）		
	県内	県外	地区全体	一般観光客	民泊 （延べ人数）	全体
国頭村	282,159 49.8%	283,946 50.2%	565,464 51.3%	192,900 <sup>※2</sup>	1,470	194,370
東村	196,320 53.5%	170,871 46.5%	367,191 33.1%	（調査中）	13,166	13,166
大宜味村	106,352 62.0%	65,304 38.0%	171,657 15.6%	1,456 <sup>※3</sup>	3,280	4,736
沖縄島北部 3村全体	<b>584,191 52.9%</b>	<b>520,121 47.1%</b>	<b>1,104,312 100%</b>	<b>194,356 （東村除く）</b>	<b>17,916</b>	<b>212,272</b>

※1：入込客数各村の県内、県外の割合は各村全体に対する割合。  
地区全体の割合は、沖縄島北部3村全体に対する割合。

※2：情報が得られた14施設（総宿泊容量推計：1,092）の宿泊人数183,311人を、国頭村内宿泊施設（22施設、宿泊容量1,149：表7参照）から按分して算出。

※3：大宜味村内11施設の実績値。

また、アンケート調査結果から、発地別の各地区への再訪率をみると、いずれの地区も県内客の再訪率が高く、概ね9割が再訪している。一方、県外客の再訪率は、大宜味村が比較的高いものの、他の2地区は3割程度となっている。

表3 発地別の再訪率（推計）

国頭村			東村			大宜味村			沖縄島北部3村全体		
県内	県外	村全体	県内	県外	村全体	県内	県外	村全体	県内	県外	3村全体
92.2%	33.9%	63.0%	94.3%	31.9%	65.0%	88.7%	57.1%	76.1%	91.6%	37.6%	66.7%

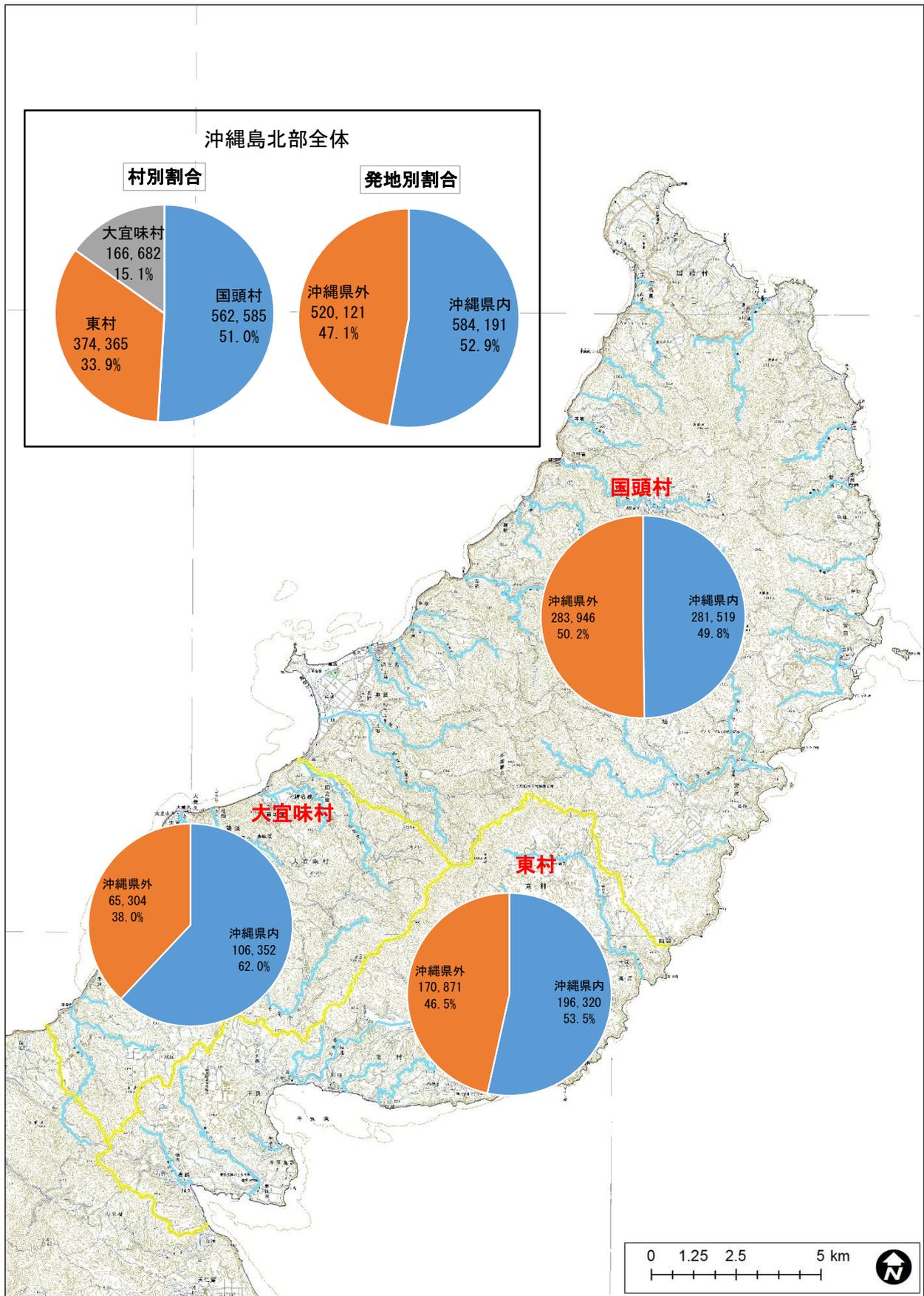


図2 観光入込の状況（推計）

## 1-1-2 主な観光拠点・フィールド利用の概要

沖縄島北部3村（国頭村、東村、大宜味村）における主な観光拠点・フィールドの利用状況について、既存データ及びアンケート調査結果、現地カウント調査結果を用いて整理した結果は、表3及び図2に示したとおりである。3村内で利用者数の多い地点としては、上位から辺戸岬（285,799人/年）、道の駅ゆいゆい国頭（観光物産センター）（105,358人/年）、ふれあいヒルギ公園（96,881人/年）等であり、年間を通じたピーク日の推計利用者数をみると、上位から辺戸岬（2,290人/日）、ター滝（1,682人/日）、くいなエコ・スポレク公園（1,402人/日）等が多くなっている。

また、各地区（国頭村、東村、大宜味村）の年間入込客数に対する各拠点・フィールドの利用者数の割合をみると、国頭村では辺戸岬（50.4%）、東村ではふれあいヒルギ公園（26.5%）、大宜味村では道の駅おおぎみ（売店・販売所）（51.6%）等が多くなっている。

表4 沖縄島北部地域の主な観光拠点・フィールド別利用状況（推計）

地区	主な拠点・フィールド名	A:各拠点・フィールドの入込客数（概数）	B:ピーク日の入込客数推計	C:地区別入込客数に対する割合（年推計）
国頭村	辺戸岬※1	285,799	2,290	50.4%
	大石林山※2	63,434	508	11.2%
	比地大滝※3	31,797	767	5.6%
	くいなエコ・スポレク公園※4	58,136	1,402	10.3%
	くいなパークゴルフ場※5	6,767	163	1.2%
	国頭森林公園（おもちゃ美術館）※3	14,948	120	2.6%
	ヤンバルクイナ生態展示学習施設※3	13,850	111	2.4%
	道の駅ゆいゆい国頭（観光物産センター）※6	105,358	844	18.6%
	奥ヤンバルの里※3	22,533	181	4.0%
	やんばる学びの森※3	22,118	177	3.9%
	やんばる野生生物保護センター※7	13,376	107	2.4%
	与那覇岳※8	1,500	36	0.3%
	伊部岳※8	600	14	0.1%
東村	つつじ祭り※9	41,245	2,291	11.2%
	山と水の生活博物館※10	9,306	75	2.5%
	つつじエコパーク※11	73,944	593	10.1%
	福地川海浜公園※9	10,207	246	2.8%
	福地ダム※9	16,611	401	4.5%
	新川ダム※9	4,539	109	1.2%
	ふれあいヒルギ公園※12	96,881	776	26.5%
	サンライズひがし（物販施設）※13	75,881	608	20.7%
	主な民間観光施設※9	37,053	-	10.1%
農業体験等※9	9,339	-	2.5%	
大宜味	芭蕉布会館※14	9,369	75	5.4%
	道の駅おおぎみ（売店・販売所）※15	88,757	711	51.6%
	ター滝※16	69,709	1,682	40.5%
	石灰岩と森と山の散策道（猪垣）※14	210	5	0.1%
	石山展望台※14	123	3	0.1%
	イギミハキンゾー※14	570	14	0.3%
	大保ダム地域防災センター・学習資料館※17	2,769	22	1.6%

- ※1:A: 現地カウントデータ (708 人) に当日の道の駅ゆいゆい国頭 (観光物産センター) の入込客数が年間入込客数 (※6:A) に占める割合 (105,358 人/261 人) を乗じた推計値。
- ※2:A: (株) 南都提供データ。
- ※3:A: 国頭村提供データ (H27 年次)。
- ※4:A: 国頭村提供データ (H20~H25 年利用者数平均値)。
- ※5:A: 国頭村提供データ (H23~H25 年利用者数平均値)。
- ※6:A: レジカウンター数に、アンケート調査 (宿泊 (国頭村内施設)、観光物産センター) で「買い物をしなかった」と回答した割合 (51.1%) を加味した入込推計。
- ※7:A: 国頭村提供データ (H26 年調査時)。
- ※8:A: 自動カウンターからの推計 (H25 年調査)。
- ※9:A: 東村提供データ (H27 年度)。
- ※10:A: 東村立山と水の生活博物館提供データ (H27 年次)
- ※11:A: 東村ふるさと振興 (株) 提供データ (H27 年次)
- ※12:A: 現地カウントデータ (240 人) に当日の道の駅ゆいゆい国頭 (観光物産センター) の入込客数が年間入込客数 (※6:A) に占める割合 (105,358 人/261 人) を乗じた推計値。
- ※13:A: レジカウンター数に、アンケート調査 (宿泊 (東村内施設)、サンライズひがし) で「買い物をしなかった」と回答した割合 (32.1%) を加味した入込推計。
- ※14:A: 大宜味村提供データ (H26 年調査時)。
- ※15:A: 売店、販売所の H27 年 10 月~12 月の買い物客数から算出した H27 年次の利用者数に、道の駅おおぎみのアンケートで「買い物をしなかった」と回答した割合 (35.0%) を加味した入込推計。
- ※16:A: 現地カウントデータ (114 人) に当日の比地大滝の入込客数が年間入込客数に占める割合 (31,797 人/52 人) を乗じた推計値
- ※17:A: 大宜味村提供データ (H23~H25 年利用者数平均値)。
- B: 辺戸岬、大石林山、国頭森林公園 (おもちゃ美術館)、ヤンバルクイナ生態展示学習施設、道の駅ゆいゆい国頭 (観光物産センター)、奥ヤンバルの里、やんばる学びの森、やんばる野生物保護センター、山と水の生活博物館、つつじエコパーク、ふれあいヒルギ公園、サンライズひがし、芭蕉布会館、道の駅おおぎみ (売店・販売所)、大保ダム地域防災センター・学習資料館は、平成 27 年の毎日入込客データがある道の駅ゆいゆい国頭 (観光物産センター) の入込客ピーク率 0.80% (418 人/51,542 人) から算出。
- 比地大滝、くいなエコ・スポレク公園、くいなパークゴルフ場、与那覇岳、伊部岳、福地川海浜公園、福地ダム、新川ダム、ター滝、石灰岩と森と山の散策道 (猪垣)、石山展望台、イギミハキンゾーは、平成 27 年の毎日入込客データがある比地大滝の入込客ピーク率 2.41% (767 人/31,797 人) から算出。
- つつじ祭りは、祭り期間 (18 日間) の平均。
- C: 国頭村、東村、大宜味村の年間入込客数 (表 1 参照) に対する割合。

凡例

Y:年間入込客数

- : 1-999
- : 1,000-9,999
- : 10,000-49,999
- : 50,000-99,999
- : 100,000-

D:日最大入込客数

※つつじ祭りは、祭り期間18日間の平均

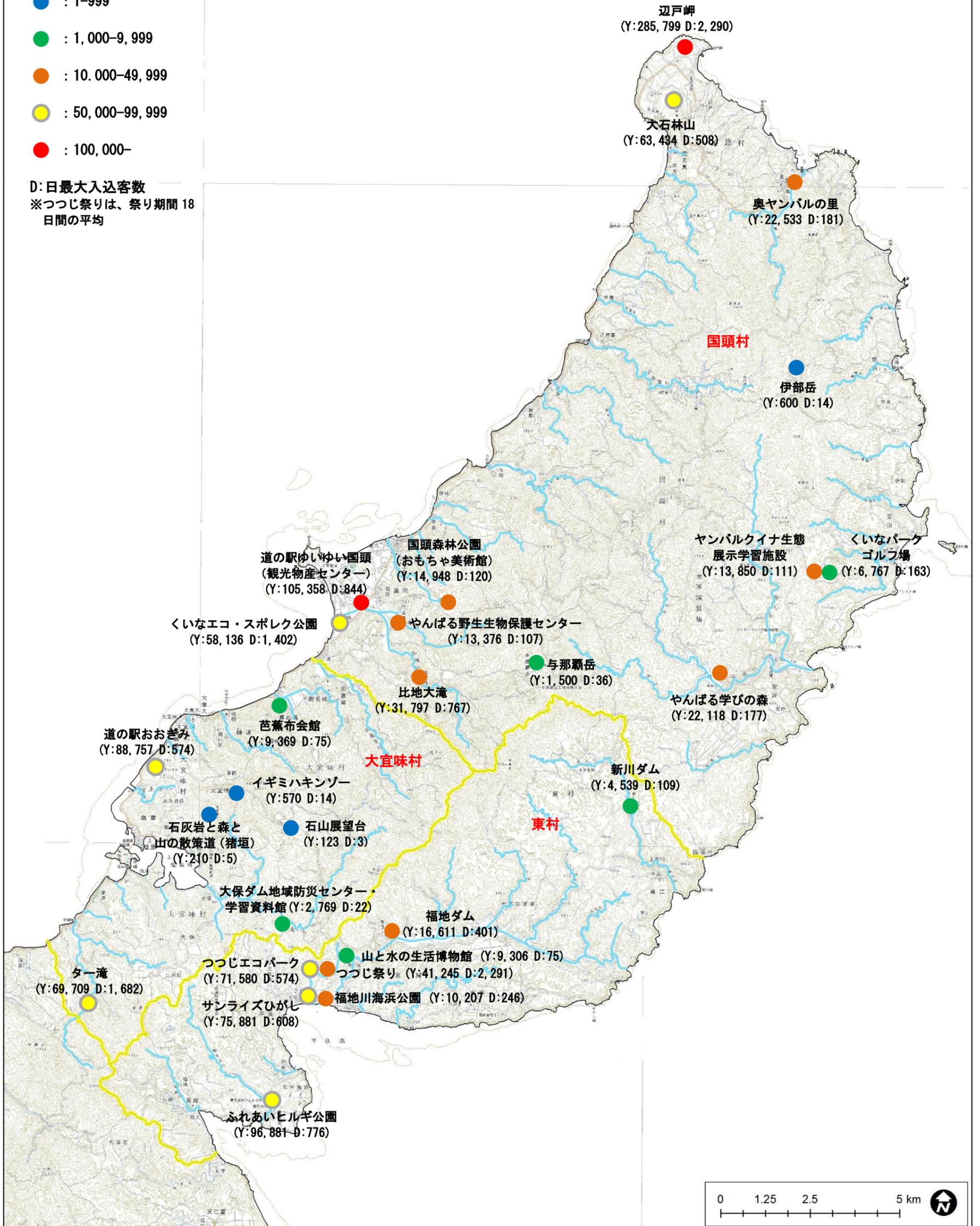


図3 沖縄島北部地域の主な観光拠点・フィールド別利用状況 (推計)

## 1-2 アンケート調査からみた来訪者の意識等

### 1-2-1 アンケート調査の概要

#### (1) アンケート調査の目的

沖縄北部地域の来訪者の利用実態や利用者の来訪者の意識・意向等を把握し、来訪者の視点からの利用上の課題等を抽出するため、アンケート調査を行った。

#### (2) アンケート調査の実施方法

アンケート調査は、主要観光施設等における現地対面式、宿泊施設留置で実施した。

なお、今回のアンケート調査は下記の方法で実施し、それぞれの場所で主に個人客を対象に意識・意向を把握したものである。(アンケート調査票は巻末に添付)

表5 アンケート調査の実施概要

実施方法	実施場所	実施日・実施期間	回収数
現地対面式	ター滝	平成 28 年 9 月 17 日	49
	道の駅おおぎみ		45
	辺戸岬	平成 28 年 9 月 18 日	50
	大石林山		50
	道の駅ゆいゆい国頭 与那覇岳		93 4
宿泊施設留置式	慶佐次ヒルギ公園	平成 28 年 9 月 19 日	56
	サンライズひがし		50
宿泊施設留置式	JAL プライベートリゾートオクマ やんばる学びの森、かりゆし荘 アダ・ガーデンホテル沖縄 奥ヤンバルの里 比地大滝キャンプ場 カナンスローファーム	平成 28 年 9 月 17 日～10 月 2 日 (国頭村の宿泊施設の内、比地大滝キ ャンプ場以外は 9 月 22 日から)	64
			計 471

### 1-2-2 来訪者の意識等

沖縄島北部 3 村を訪れた来訪者の満足度、再訪率、再訪意向、ガイドの利用率は、以下のように整理される。満足度をみると、「満足できなかった」との回答は無いものの、「とても満足した」は全体の 48%であった。再訪率は全体で 67%であったが、東村は「初めて」の割合が多いため、他の 2 地区と較べて再訪率は低い。また、全体の 70%が「是非来たい」と回答している。一方、ガイドの利用率は、東村が 17%とやや多いものの、全体では 12%であり、特に大宜味村は 5%に満たない。

表6 来訪者の意向

地区	満足度					再訪率	再訪意向			ガイド 利用率
	とても満 足した	満足した	どちらと もいえな い	あまり満 足できな かった	満足でき なかった		是非 来たい	できれば 来たい	来たく ない	
国頭村	51.9%	43.6%	4.1%	0.4%	0.0%	63.6%	66.0%	33.6%	0.4%	13.9%
東村	49.1%	47.2%	3.8%	0.0%	0.0%	50.0%	75.0%	25.0%	0.0%	16.5%
大宜味村	48.3%	44.8%	6.9%	0.0%	0.0%	76.1%	88.6%	11.4%	0.0%	4.4%
全体	48.2%	44.7%	6.6%	0.5%	0.0%	66.7%	69.8%	30.0%	0.5%	12.4%

※四捨五入の関係で、合計が 100%にならない場合がある。

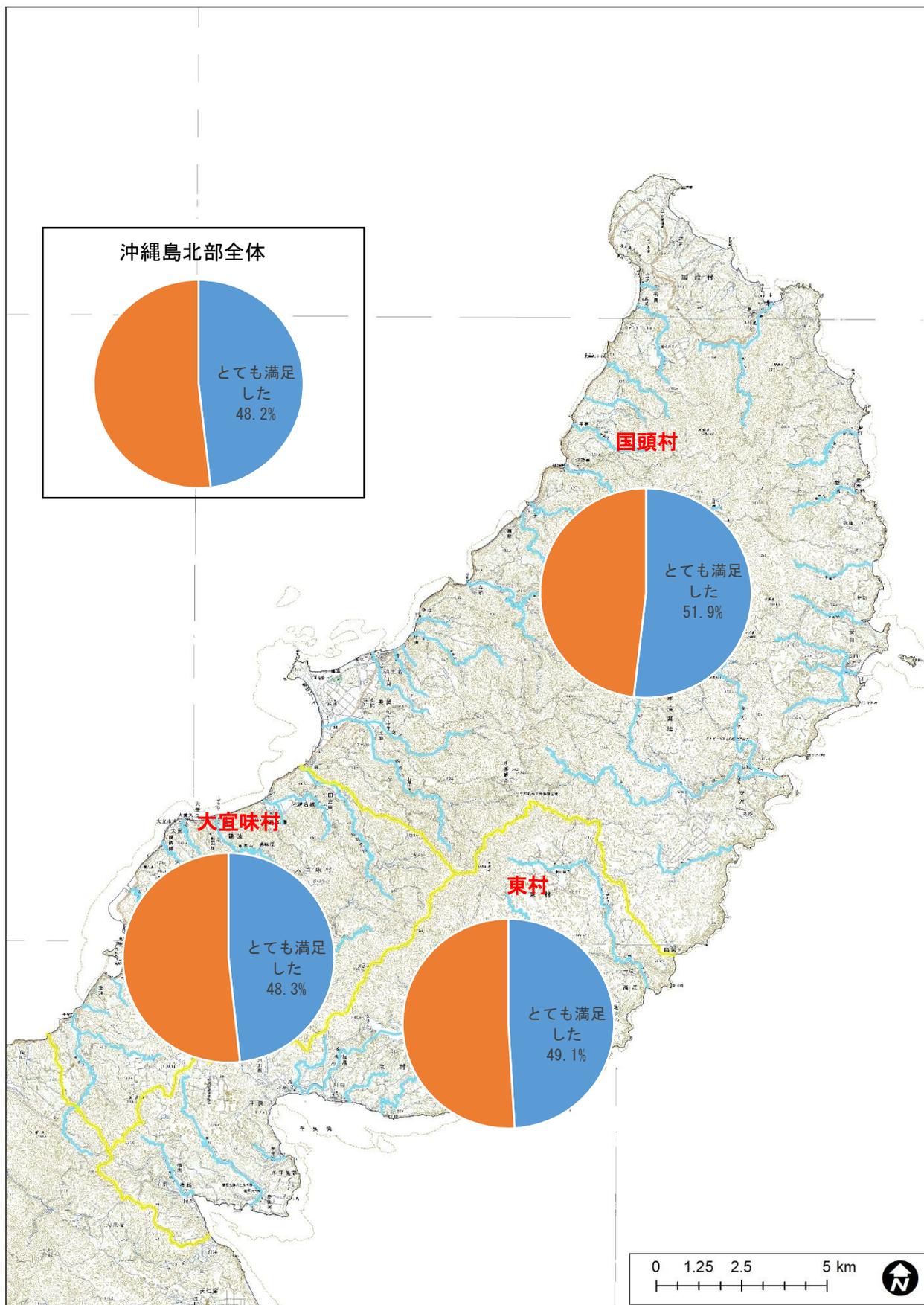


図4 満足度（「とても満足した」の回答割合）

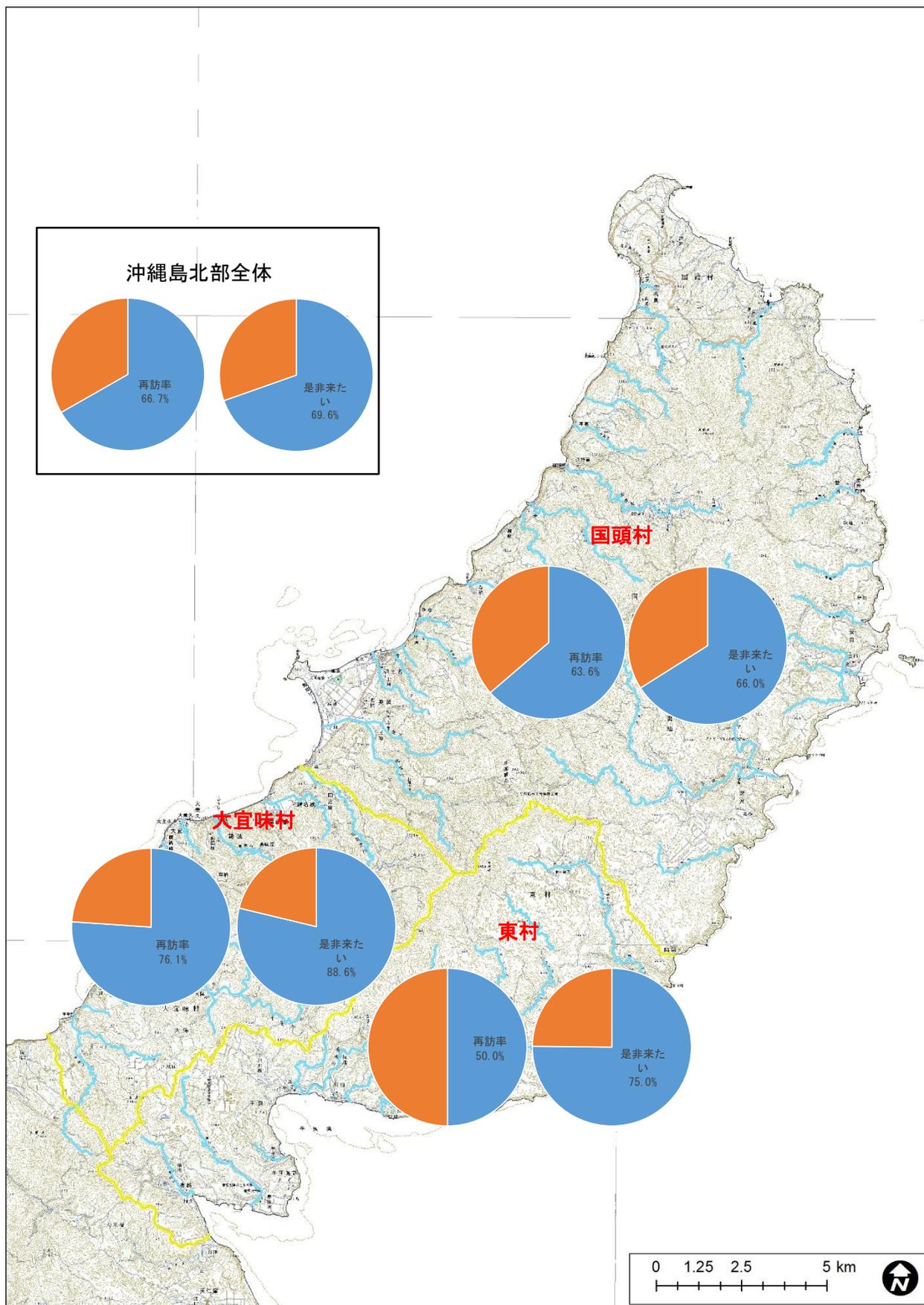


図5 再訪率と再訪意向（「是非来たい」の回答割合）

### 1-3 受入体制の現状

#### 1-3-1 宿泊施設

沖縄島北部 3 村には、ホテルや民宿、バンガロー、キャンプ場など大小 42 軒の宿泊施設があり、全体で 1,482 人の宿泊容量があるが、宿泊施設の約 52%、宿泊容量の約 78%が国頭村に集中している。

一方、修学旅行や農業体験等を対象とした民泊受入数は、全体で約 1.8 万人であり、その内東村が約 74%を占めている。

表 7 沖縄島北部地域の宿泊施設等

<宿泊施設>：平成 27 年 12 月 31 日現在

村名	宿泊施設区分								各村計	
	ホテル・旅館		民宿		ペンション・貸別荘		団体経営施設			
	軒数	宿泊容量	軒数	宿泊容量	軒数	宿泊容量	軒数	宿泊容量	軒数	宿泊容量
国頭村	8	994	12	126	2	29	0	0	22	1,149
東村	0	0	3	34	5	88	1	111	9	223
大宜味村	0	0	5	50	6	50	0	0	11	100
3 村計	8	994	20	210	13	167	1	111	42	1,482

出典：「平成 27 年版観光要覧」：H28.8：沖縄県

<民泊受入実績数>：平成 27 年度データ

国頭村	1,470
東村	13,166
大宜味村	3,280
3 村計	17,916

資料：各村提供データ

#### 1-3-2 エコツアー事業者

世界自然遺産登録が実現した場合に入り込み客が増加することを見すえ、自然資源のオーバーユースによる劣化を防ぎ、保全と利用を両立させる仕組みを確立するため、平成 27 年度から 29 年度の 3 カ年をかけて、沖縄県森林管理課が主管となり、「やんばる型森林ツーリズム推進体制構築業務」が進められている。

この業務では、沖縄島北部 3 村が主体的かつ一体的に森林ツーリズムを推進していくため、各村で、エコツーリズム事業者を構成員に加えたワーキンググループ（国頭村 WG、東村 WG、大宜味村 WG）を設立し、各村及びやんばる全体の森林ツーリズム推進協議会となる組織の設立に向けた検討を行っている。

現在策定中の森林ツーリズム推進全体構想では、森林ツーリズム（自然、文化といった森の恵みを、体験を通して感じる、学ぶ）は、自然環境及び安全性、地域社会の持続性を確保するという「保全原則」を前提としており、これを適切に実行できるガイドを協議会が認定する「ガイド認定・登録制度」の検討が進められている。

具体的には、利用するフィールドにおける保全原則を守るために協議会が利用ルールを設定するが、「認定ガイド」は利用ルールを守ったうえでツアーを開催することが認定条件の一つとなっており、「認定ガイド」以外はエコツアー事業者としてフィールドを利用できなくなる。平成 28 年 12 月現在、3 村内で計 7 つのフィールドについて検討が進んでいるが、検討によってフィールド数は、今後増減していく予定である。

この他のガイドの認定要件として、自然資源等のモニタリングに参加すること、質の高いツアーを提供するスキルを得るための講習会に参加することなども検討されている。

表8 沖縄島北部3村のエコツーリズム事業者数

項目		大宜味村	東村	国頭村	合計
村内に 拠点が ある	エコツーリズム事業者の数(※)	2	8	7 (集落散策を入れるなら+2)	17 (集落散策を入れるなら+2)
	上記の事業者に所属するガイドの数	6名	15名	17名 (非正規または事業者登録ガイド入れるなら+29)	38名 (非正規または事業者登録ガイド入れるなら+29)
村外に 拠点が ある	エコツーリズム事業者の数(※)	20以上	2	少なくとも5 (※※)	
	上記の事業者に所属するガイドの数	不明	4名	少なくとも18名(※※)	

(事業者・ガイドの数は、各村の森林ツーリズムWG事務局で把握している数)  
 ※事業者の数については、一人のガイドが単独にツアーを行っている場合も、1事業者としてカウント  
 ※※「奄美・琉球の世界自然遺産登録に向けた自然環境の利用と保全の現状及び将来の利用予測調査(H26・沖縄県自然保護課)」よりプレック研究所が推計

### 1-3-3 レンタカー・タクシー

沖縄島北部3村の内、レンタカーは国頭村奥間にフジレンタカーの営業所があり、保有台数は軽自動車3台程度配備されている。

タクシーについては、国頭村に1事業者で所有台数は3台である。

#### 1-3-4 水道供給量

沖縄島北部3村の水道は、全て簡易水道である。この内、国頭村には5箇所の浄水場が整備され、西海岸地区（大川山浄水場）はダム直流、辺土名（辺土名浄水場）は表流水、奥（奥浄水場）、安波（安波浄水場）、東海岸地区（伊部浄水場）は伏流水を水源としている。

東村には川田浄水場が整備され、水源はダム直流である。大宜味村には津波浄水場が整備され、表流水・伏流水を水源としている。

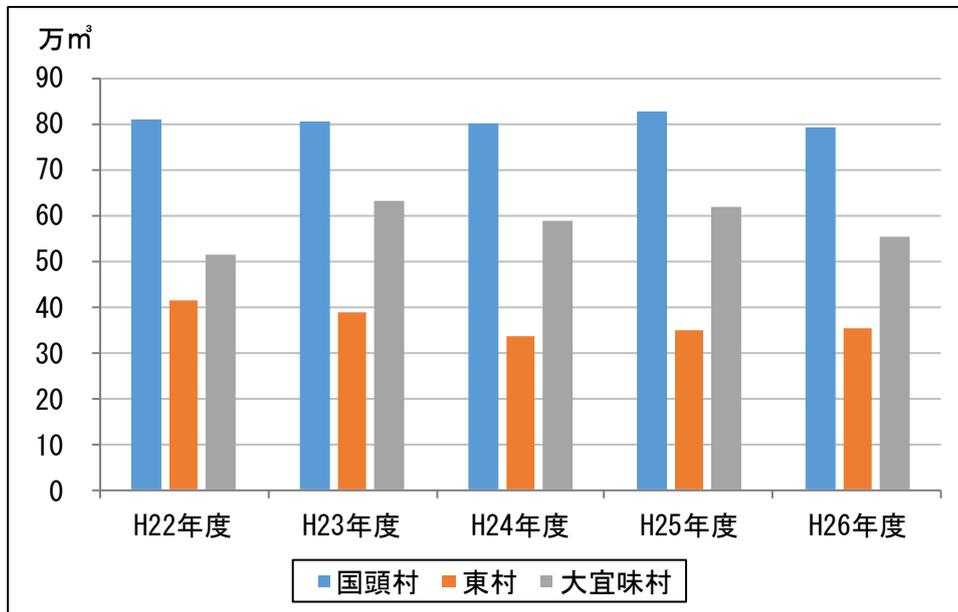


図6 沖縄島北部3村の実質年間給水量（万m³）の推移  
資料：「沖縄県の水道概要（平成23年度版～平成27年度版）」：沖縄県保健医療部生活環境課

### 1-3-5 ゴミ処理容量

沖縄島北部3村の一般廃棄物処理は、国頭村環境センター（焼却ゴミ）、やんばる美化センター（ガラス類、ペットボトル、紙類等のリサイクル資源ゴミの保管及び焼却残渣等の最終処分）において行われている。

表9 沖縄島北部3村における一般廃棄物最終処分場整備状況（平成26年度）

埋立開始年度	埋立終了年度	埋立地面積 (㎡)	全体容量 (m <sup>3</sup> )	残余容量
2006年度	2025年度	7,200	45,000	34,678

資料：一般廃棄物処理実態調査：環境省

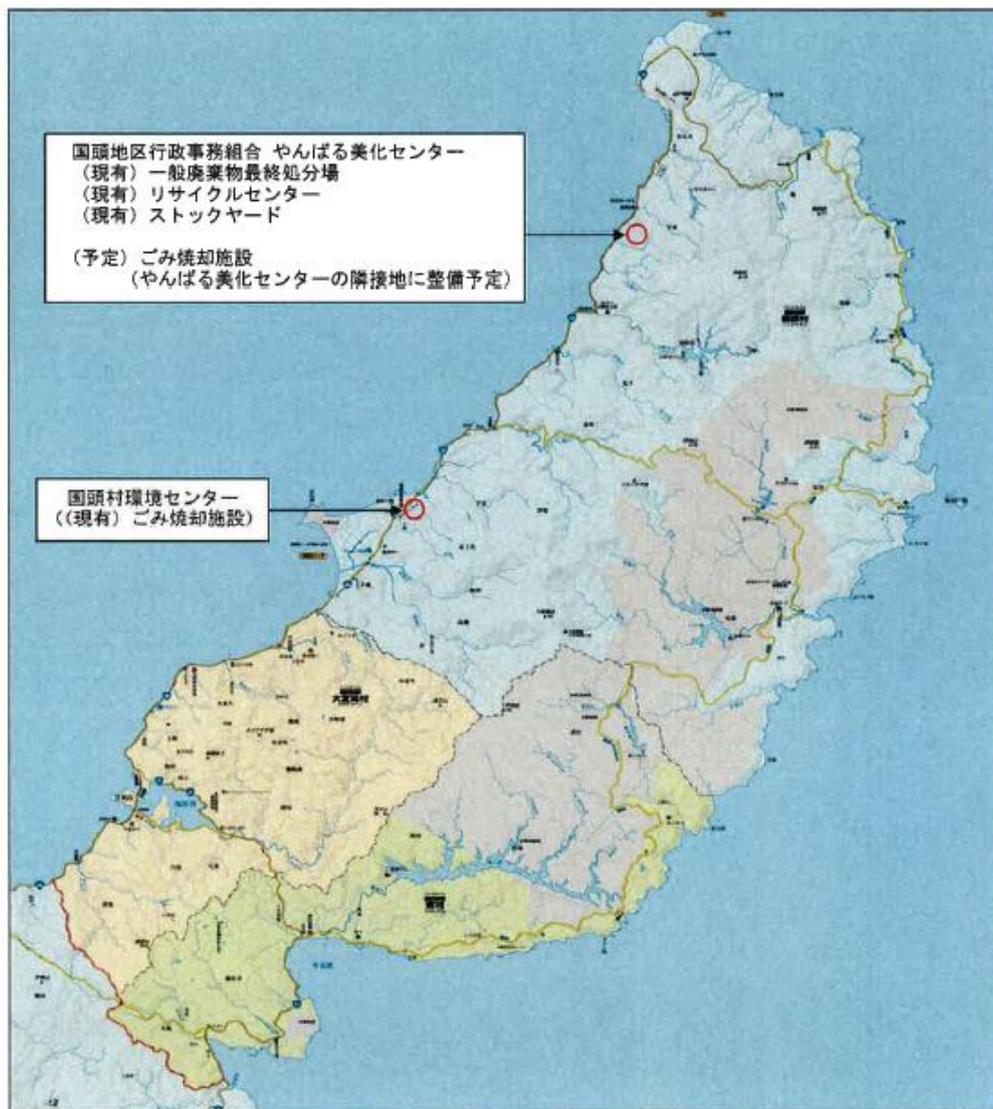


図7 沖縄島北部3村の一般廃棄物処理施設の状況・予定

出典：「国頭地域 循環型社会形成推進地域計画」：国頭村・大宜味村・東村国頭地区行政事務組合  
：平成24年8月14日

## 2. 沖縄観光の動向と世界遺産登録後の変化予測

### 2-1 観光入込客数の変化予測

「沖縄観光推進ロードマップ」（平成 27 年、沖縄県文化観光スポーツ部）によれば、第 5 次沖縄県観光振興計画の平成 33 年度の数値目標である沖縄県の入域観光客数 1000 万人を前提とした年度ごとの国内・海外別の誘客目標は下表に示すとおりであり、平成 33 年では、日本人の県外観光客数は 800 万人、海外観光客数は 200 万人と設定されている。

表 10 市場別の誘客目標 (万人)

	H28	H29	H30	H31	H32	H33
<b>沖縄への観光客数合計</b>	<b>800</b>	<b>814</b>	<b>828</b>	<b>840</b>	<b>920</b>	<b>1000</b>
<b>国内市場（観光客数）</b>	<b>680</b>	<b>687</b>	<b>694</b>	<b>700</b>	<b>750</b>	<b>800</b>
うち空路客数	677	684	691	697	747	797
うち海路客数	3	3	3	3	3	4
<b>海外市場（観光客数）</b>	<b>120</b>	<b>127</b>	<b>134</b>	<b>140</b>	<b>170</b>	<b>200</b>
うち空路客数	97	103	110	116	145	175
うち海路客数	23	24	24	25	25	25

※千人以下を四捨五入のため、合計が合わない場合がある。

こうした、沖縄県全体の観光需要の増大に加え、沖縄島北部 3 村については、国立公園指定及び世界自然遺産登録といった外部環境の変化により、現在の北部 3 村への来訪率が現在の 7.6%（H21～27 年の平均値）よりも高まるものと推定される。他の世界遺産地域の事例から、世界遺産効果による増加率を 1.5 倍程度と設定すれば、北部 3 村の来訪率は県外客及び海外客ともに 11.4%に増加することとなる。

本業務の調査結果から把握された北部 3 村の平成 27 年度の観光入込客数は、114 万人／年（県内客：58 万人、県外客：52 万人、海外客：4 万人）であるが、このうち県内客数は現状のまま維持されると仮定し、県外客と海外客に関しては、上記のような沖縄県全体の観光客数の誘致目標と世界遺産効果による増加率を踏まえるならば、世界遺産登録後の H33 年度時点の観光入込客数は、169 万人／年（県内客：58 万人、県外客：91 万人、海外客：20 万人）程度と推定される。

### 2-2 利用者ニーズ及び利用形態の変化予測

世界自然遺産への登録を契機として、来訪者は世界遺産として評価された生態系や生物多様性への興味や関心が高まることから、風景鑑賞だけでなく自然探勝や生物観察利用、さらにはより深く自然の中に入り込むようなフィールド体験型の利用等に対するニーズが高まることが想定される。現在でも北部 3 村の観光客の来訪目的では「やんばるの森の雰囲気を感じに」がトップに位置しており、特に宿泊利用者においては「やんばるの森の雰囲気を感じに」だけでなく、「珍しい動植物を見に」という利用目的が高い割合を占めている。

山や森や川などに直接入り込むフィールド体験利用に関しては、白神山地や知床のように自然環境が厳しく、ツキノワグマやヒグマとの遭遇といった危険もある地域では、専門のガイドによるサポート体制が構築されていても、一定以上の技量や体力が要求されることから利用者数はそれほど大幅に増加することはない。しかし、屋久島や小笠原諸島のように年間を通じて比較的温暖な気候であり、事故や遭難以外では直接的な危険のない地域であれば、フィールド体験型の利用は大幅に増加している。

沖縄島北部地域では、ハブによる危険はあるものの、屋久島ほど急峻で標高の高い山岳地帯はなく、小笠原同様に亜熱帯気候であることから年間を通じて暖かく、車道から比較的容易に森や川の中

に入ることができるため、事前にフィールド情報が入手できればガイドによるサポートの有無に関わらず、フィールド体験利用の需要は大幅に増大するものと想定される。

また、特に世界自然遺産登録に際しては、推薦地の遺産価値を示す象徴的な動植物の存在が強調されてマスコミ等で取り上げられる可能性が高いことから、象徴的な動植物を見たいという利用者の欲求が過度に高まる可能性もある。そのため、生態系や生物多様性に関する解説・展示がなされている野生生物保護センターやヤンバルクイナの生態学習展示施設、やんばるの森の雰囲気体験できるフィールド型の利用拠点に対する需要は相当程度高まることが想定される。

さらに、従来は利用されなかったフィールドや夜間や早朝など従来は利用がなかった時間帯の利用の増加などの変化が生じる可能性もあり、それに伴い宿泊利用のニーズも高まることが想定される。

### 3. 観光・エコツーリズム等の主な施設整備状況と計画

沖縄本島北部 3 村における観光・エコツーリズム等に関わる主な施設整備状況及び今後の計画については、図 5 に示すとおりである。また、主な拠点施設の概要を以下に整理した。

名称	施設概要	現況写真
辺戸岬	沖縄本島最北端に位置した岬であり、展望施設、駐車場、飲食店が整備され、主要な立ち寄り地点となっている。海岸と琉球石灰岩の岸壁からなる景色を楽しむことができ、条件が良ければ与論島を望むことができる。	
大石林山	沖縄本島最北端のカルスト地形、奇岩・巨石と亜熱帯林で形成された大石林山に、バリアフリーコースを含め、4 つの散策コース及び休憩施設、飲食施設等が整備されている。	
茅打ちバンタ	沖縄本島北部の石灰岩からなる崖地に位置し、展望所、東屋、トイレ、ベンチ、駐車場が整備され、海崖風景を望むことができる景勝地となっている。	
奥ヤンバルの里	沖縄本島北部滞在拠点の一つであり、宿泊施設、レストラン、民具資料館、パークゴルフ場が整備された、国頭村奥区営の施設である。	
ヤンバルクイナ生態展示学習施設	沖縄本島北部地域のシンボルであるヤンバルクイナの飼育・展示施設あり、生きたヤンバルクイナを間近に観察できる。	
やんばる学びの森	沖縄本島北部の森林利用及び宿泊の拠点施設であり、宿泊施設・レストラン及びネイチャートレイルが整備されている。	

名称	施設概要	現況写真
<p>やんばる野生生物保護センター (ウフギー自然館)</p>	<p>環境省の事務所機能を持つ、沖縄本島北部地域の自然環境保全の拠点である。館内では一般向けの展示や図書のコナーがあり、沖縄本島北部地域の自然環境について学ぶ場となっている。</p>	
<p>比地大滝</p>	<p>比地大滝へ至る歩道及び、キャンプ場、管理棟が整備されている。歩道は登山客ではない一般観光客でも歩くことが出来るように整備されている(入場は有料)。また、入り口にはキャンプ場及びその付帯施設が整備されている。</p>	
<p>国頭村森林公園</p>	<p>与那覇岳の裾野に位置し、森林セラピーのフィールドになっている。キャンプ場、バンガロー等も整備され、「やんばる森のおもちゃ美術館」では、沖縄の木材を使って製作したおもちゃに自由に触れて遊ぶことができる。</p>	
<p>道の駅ゆいゆい国頭</p>	<p>国道 58 号沿いの道の駅であり、物産店、レストラン等が整備されている。また、隣接してやんばる 3 村観光拠点施設(観光案内所)等が整備され、沖縄本島北部地域の観光拠点の中核施設の一つである。</p>	
<p>山と水の生活博物館</p>	<p>東村の歴史・文化・生活や自然環境に関する展示が常設されているほか、図書室が整備されている。生活民具や農具、生物の剥製や生きた個体等が展示されている。</p>	
<p>ふれあいヒルギ公園</p>	<p>慶佐次川河口に広がるマングローブ林の周辺に整備された公園であり、ヒルギを間近で観察することができる木道や展望台、生き物に関する解説板等が整備されている。</p>	
<p>つつじエコパーク</p>	<p>4.5ha の面積に 48,000 本のつつじが咲くつつじ園を中心とした施設であり、バンガローやオートキャンプ場、パターゴルフ場などが整備されている。家族連れや修学旅行等でも利用しやすい施設である。</p>	 <p>(写真：つつじエコパーク HP より)</p>

名称	施設概要	現況写真
福地川海浜公園	平成 27 年にオープンした新しい施設である。バーベキューや海水浴、カヌー等が楽しめる。	 <p>(写真：東村観光推進協議会 HP より)</p>
サンライズひがし	県道 70 号沿いの東村の特産品加工販売所である。生産量日本一を誇るパインや、パインを使ったジャム等の加工品やハーブ製品、東村産のお茶や農産物の直販所、レストランが整備されている。	
芭蕉布会館	地場産業であり、国指定重要無形文化財である「喜如嘉の芭蕉布」の振興を図るために設立された施設である。1 階には大宜味村の伝統工芸である芭蕉布製品が常に展示・販売されており、製造工程のビデオ上映も行われている。2 階は作業場となっている。	
道の駅おおぎみ	国道 58 号沿いの道の駅であり、大宜味村産の赤土大根やシークァーサー、タンカン、タルガヨー等の柑橘類などを販売する直販所、大宜味産の日本そばや沖縄料理を提供する食堂、観光案内所が整備されている。	
ター滝	トレッキングやシャワークライミング、川遊び等のフィールドとして人気が高い。平成 28 年にトイレ・シャワー施設、東屋を備えた平南川駐車場（80 台）が整備された。	
大保ダム地域防災センター・学習資料館 (ぶながや館)	ダム湖周辺は園地として整備されており、湖内にはカヌー用浮棧橋も設置されている。学習資料館の展示スペースには、生物標本や環境保全に関するパネル等が展示されており、ダム事業に関する情報発信や防災意識の啓発、環境学習、交流活動の拠点である。	

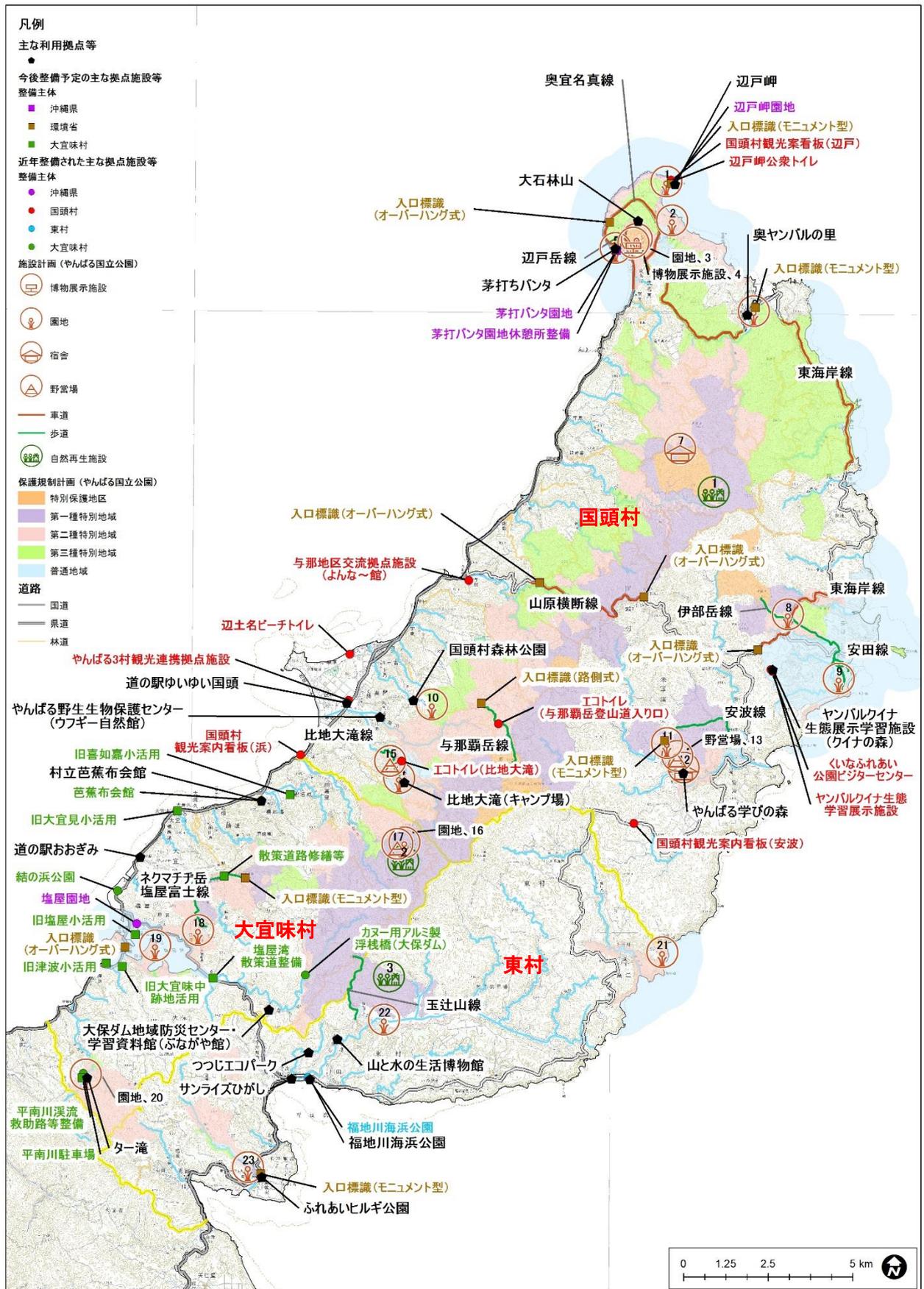


図8 観光・エコツーリズムの主な施設の整備状況と計画

## 4. 世界遺産推薦地管理計画における観光・エコツーリズム

奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島世界自然遺産推薦地包括的管理計画では、観光・エコツーリズムに関しては、以下のような基本方針が示されている。施設整備に関して下線赤字に示したとおり、大多数が訪れるマスツーリズム型の周遊観光は主に緩衝地帯や周辺地域で受入れるとともに、推薦地の魅力を伝える利用拠点の整備を検討することとされている。また施設整備上の留意点として、利用による環境負荷を低減し、持続可能な利用に資するため必要最小限に留めるよう追記されている。

### 5) 適正利用とエコツーリズム

#### (1) エコツーリズム等の持続可能な観光の戦略的推進

観光は遺産価値への理解を深める機会となる一方、無秩序な観光事業の拡大や過剰利用の発生は、遺産価値を損ない、来訪者の期待や満足度の低下をもたらす要因となる。

地域関係者、事業者等は、遺産価値が地域の魅力であることを理解し、その保全に常に留意しつつ、遺産の価値や利用に関する効果的な情報発信や適正な利用に向けたルール等のもと、持続可能な観光を戦略的に推進する。大多数が訪れるマスツーリズム型の周遊観光については、主に緩衝地域や周辺地域において受入体制を整備し、推薦地の魅力を伝える利用拠点の整備をあわせて検討する。また、自然環境に加え、自然と人との共生の文化の普及啓発を行うことが、遺産の価値への深い理解、地域社会の持続的な発展に貢献することから、集落散策、歴史文化体験、地域産品などを組み込んだ観光を積極的に推進する。

推薦地においては、適正な利用に向けたルール等のもと、エコツーリズム等の豊かな自然や固有の文化を活かした自然体験型観光の推進を図る。

整備については、利用による環境負荷を低減し、持続可能な利用を行うため、必要最小限に留める。

#### (2) 適切な利用コントロールの実施

遺産価値の保全をしつつ持続可能な観光を実現するためには、保全すべき対象の特性と変化の状況及び利用実態との関係を十分把握したうえで、必要に応じて、適切な利用コントロールの実施を検討する必要がある。

利用コントロール手法の検討においては、管理機関、観光事業者、地域住民、NPO 等が参画して合意形成を図りつつ、協力・協働の体制を確立したうえで実施するとともに、来訪者の理解と協力を得るための普及啓発にも積極的に取り組む。

#### (3) エコツアーガイド等による普及啓発

観光事業者は、遺産価値に関するより多くの知識や情報、コミュニケーションや安全管理等の技術の向上を図るため、ガイドの人材育成や質の高いガイドの認定・登録制度の導入等を推進する。

また、エコツアーガイド等は、遺産価値に対する来訪者の理解を深めることが保全上重要であることを十分認識し、来訪者に構成資産の顕著な普遍的価値を効果的に解説し、実際に体感する機会を提供する。また、地域住民が長い年月をかけて、固有な動植物を含む自然資源を利用して生活を営んできた、自然と人との共生の歴史・文化についても正しく理解したうえで、地域固有の資源として来訪者にその魅力を積極的に伝えていく。

包括的管理計画において設定された沖縄島北部の推薦地、緩衝地帯、周辺地域の範囲は以下に示すとおりである。

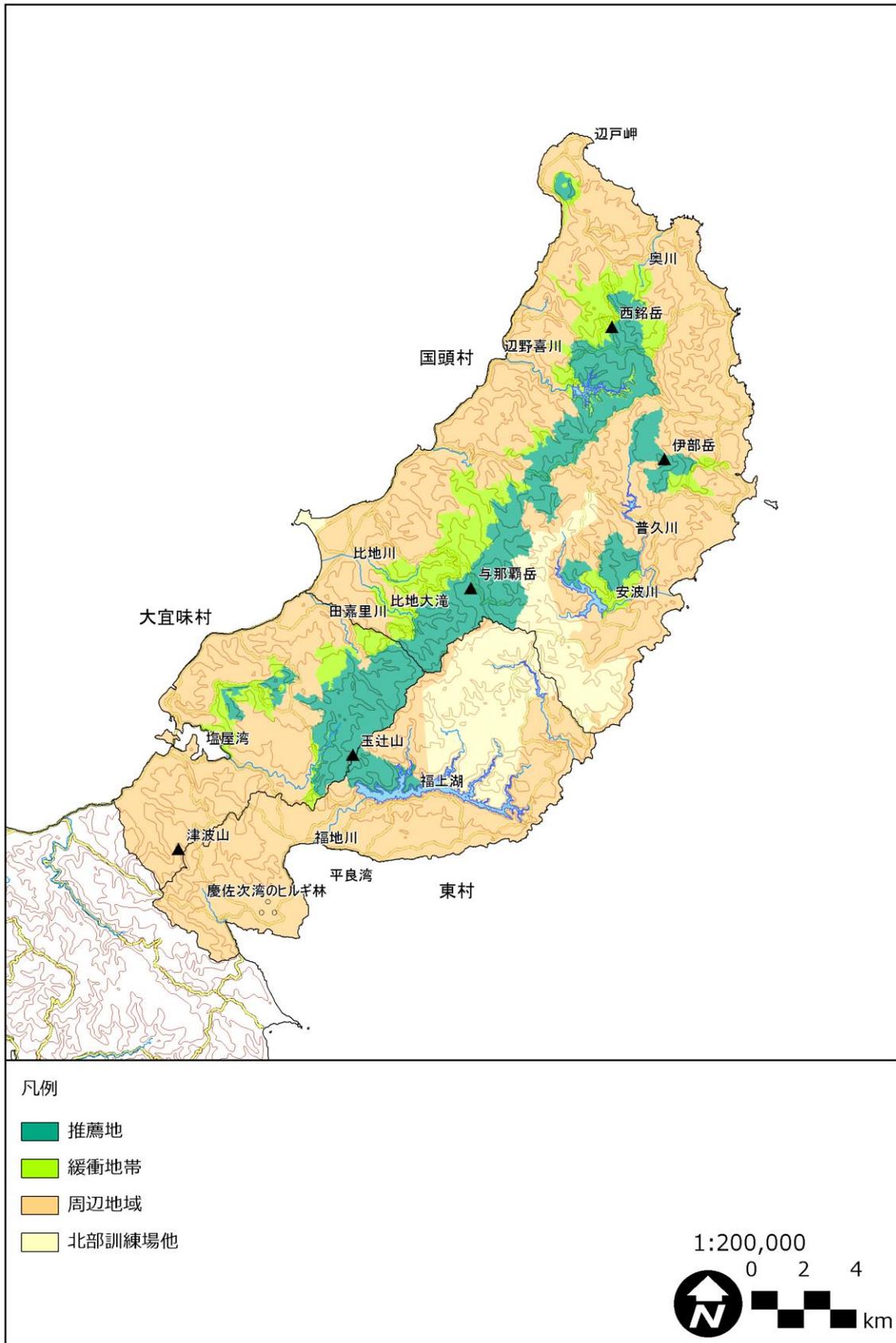
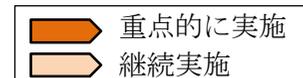


図9 包括的管理計画において設定された推薦地、緩衝地帯、周辺地域の範囲

また、沖縄島北部においては、先に示した「適正利用とエコツーリズム」に関する基本方針に従って、以下に示すような行動計画が策定された。

◆沖縄島北部行動計画（抜粋）

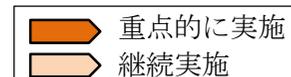


事業項目	実施主体	実施時期			対象範囲			事業の内容	目標と【評価指標】
		短期	中期	長期	推薦地	緩衝地帯	周辺地域		
<b>5) 適正利用とエコツーリズム</b>									
1 世界遺産に関する観光ビジョンの策定による持続可能な観光の推進	沖縄県 各村 地元関係団体				●	●	●	世界自然遺産に関わる各種行政機関、地域関係団体等が参加した協議会等の場で、関係者の情報共有、意見交換による合意のもとで、沖縄島北部3村が連携し、世界遺産沖縄島北部における観光・エコツーリズム、保護保全の在り方を示した観光ビジョンを策定して遺産価値の維持と観光振興を両立する。	世界遺産推薦地における観光ビジョンが策定され、遺産価値の維持と観光振興の両立が実現される。
2 体験・滞在・交流による観光スタイルの確立	沖縄県 各村 地元関係団体				●	●	●	エコツーリズムやグリーンツーリズム、ブルーツーリズム、民泊、集落散策、歴史文化体験などの様々な形態のツーリズムを融合し、世界遺産の周辺地域も含めた魅力的なプログラムを検討・開発するなど、3村の連携により、体験・滞在・交流による沖縄島北部地域の観光スタイルを確立する。	世界遺産の周辺地域も含め、地域の自然・文化を活用した魅力的な体験・滞在・交流メニューを提供できる体制の設置。
3 森林ツーリズムの推進体制の構築	沖縄県 各村 地元関係団体				●	●	●	森林の適切な利用を図るためのルール、モニタリングとフィールド管理及びルールを守りながら質の高いツアーを提供するためのガイド制度等の仕組みを構築し、持続的な資金の確保により、地域が自立してこれらを管理・運営する組織体制の整備（協議会の設置等）を目指す。	遺産価値（生物多様性と生態系）の保全と森林の利活用の両立による山村地域の振興に資する森林ツーリズム推進体制の構築の実現。

事業項目	実施主体	実施時期			対象範囲			事業の内容	目標と【評価指標】
		短期	中期	長期	推薦地	緩衝地帯	周辺地域		
4 適切な利用コントロールの実施及び利用ルールの設定・遵守	環境省 沖縄県 各村 地元関係団体				●	●	●	遺産価値（生物多様性と生態系）を保全するため、以下の取組み等を実施することで自然利用に伴う負荷の低減を図る。 ○利用分散のための周辺地域への利用誘導 ○統一的な希少種の観察ルール等の検討 ○世界遺産地域内道路及び接続道路の通行管理	自然利用に伴う負荷が低減され、遺産価値（生物多様性と生態系）の保全がなされる。
5 利用の質の向上に向けた取組の強化	沖縄県 各村 地元関係団体				●	●	●	世界遺産における適正かつ質の高い利用を実現するため、ガイド等の人材育成、プログラム開発等のソフト面での対応を強化する。	世界遺産地域にふさわしい適正かつ質の高い利用の提供
6 施設整備による負荷の低減と適正利用の推進	環境省 沖縄県 各村 地元関係団体					●	●	生態系や生物多様性などの遺産価値を利用者に実感させながら、利用に伴う負荷の低減と遺産地域における適正な利用を推進するために、既存施設の効果的な活用方法の検討及び以下のような利用施設の管理・整備を行う。 ○クイナ自然の森の維持管理 ○ヤンバルクイナ生態展示学習施設の運営 ○情報発信拠点施設等の整備・運営 ○森林の魅力を引き出す施設整備 ○希少生物の生態展示学習施設の充実	遺産価値の保全と適正利用の両立、利用者の体験の質の確保。【拠点施設利用者数】

先に示した行動計画の施設整備に関する項目において、今後の検討課題を整理した『課題リスト』では、以下のような課題があげられている。

◆沖縄島北部課題リスト（抜粋）



事業項目	実施主体	実施時期			対象範囲			事業の内容	目標と【評価指標】	備考 (検討・評価機関)
		短期	中期	長期	推薦地	緩衝地帯	周辺地域			
①より効果的な既存施設の活用	各村							沖縄島北部においては、「国頭村森林公園」や「やんばる学びの森」、「森林セラピーロード」等、すでに整備された自然利用に関する施設がある。世界遺産地域全体の適正利用のあり方の検討にあわせ、各施設のより効果的な活用方策についてし、実行する。	各施設単体ではなく、沖縄島北部全体の利用方策にあわせ、それぞれの施設が有機的に連携した利用形態の確保。	
②クイナ自然の森の維持管理	国頭村NPO							マングースやノネコ等の侵入を防ぐフェンスで囲った生息地をクイナ自然の森とし、ヤンバルクイナの保護・生態研究をはじめ、飼育下繁殖個体の野生復帰に向けた放鳥試験に活かす。	クイナ自然の森内の生息環境及び、個体群が安定的に維持される状況を確保。	クイナ自然の森管理運営協議会
③ヤンバルクイナ生態展示学習施設（クイナの森）の運営（国頭村ヤンバルクイナ保護増殖事業の継続実施）	国頭村							一般来訪者向けのヤンバルクイナ生態展示を行うとともに、職員による解説や、ポスター等を用いてヤンバルクイナに関する普及啓発を行う。	ヤンバルクイナの生態展示の継続。	
④情報発信拠点施設等の整備	環境省 沖縄県							世界自然遺産の保全・利用・管理に関わる情報発信、自然の成因や体験の歴史的な理解や自然・文化・暮らしに関する環境学習、フィールド利用のルール周知や事前準備のための機能を有する施設の整備を検討し、他の拠点施設やフィールド利用との連携を強化する。	世界遺産の入口機能・利用拠点等に関する施設の整備。	
⑤森林の魅力を引き出す施設整備	沖縄県 各村 ツーリズム 関係団体							魅力的な森林体験や眺望が楽しめる利用施設等を整備し、世界遺産の森の価値を誰もが実感できる自然探勝フィールドや利用拠点を確保する。	世界遺産の価値を感じながら高い満足度を得られる利用施設の整備。	
⑥希少生物の公開展示施設の充実	沖縄県 各村							ヤンバルクイナ生態展示学習施設や保護・増殖事業、傷病鳥獣施設との連携を強化することにより、多くの人々がヤンバルクイナだけでなく他の希少生物も観察できる生態展示施設を整備するとともに、フィールド型の展示施設の整備の可能性についても検討する。	沖縄島北部に生息する様々な希少生物を観察できる施設の確保。	

## 5. 拠点整備構想検討上の課題

### 5-1 利用形態・特性からみた課題

#### 5-1-1 周遊型マストツアー観光の現状と課題

沖縄島北部3村における観光利用の最大の特徴は、県内客数の割合が約53%と高く、半数以上が県内客で占められており、県内客の再訪率は9割以上と極めて高いという点にある。したがって、現在の沖縄島北部3村は、主に沖縄島中南部の住民がやんばるの森の雰囲気や景色を楽しむためにドライブ等を兼ねて度々訪れる場所として利用されているものと推察される。

また、年間を通じた利用状況としては、春休みシーズン、ゴールデンウィーク、夏休みシーズンにピークがあり、繁忙期と閑散期の差が大きいことがあげられる。

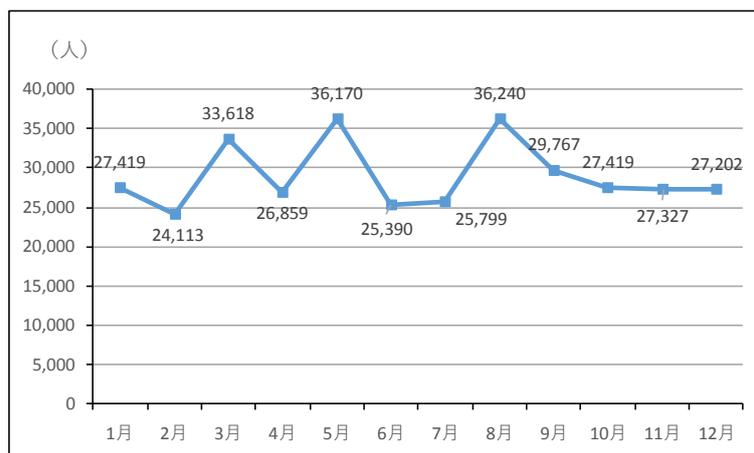


図10 月別入込客数の推移（H27年1月～12月）

※H27年1月～12月の月別入込データがある施設（大石林山、ヤンバルクイナ生態展示学習施設、やんばる学びの森、国頭森林公園（おもちゃ美術館）比地大滝、奥ヤンバルの里、道の駅ゆいゆい国頭（観光物産センター）、道の駅おおぎみ、山と水の生活生活博物館、サンライズひがし（物販施設）の総計

沖縄島北部3村の中での最大の利用拠点は国頭村の辺戸岬であり、年間約28万人程度の入込客数があり、ピーク時には一日2,300人程度の観光客を受け入れているものと推定される。利用形態は展望台や遊歩道からの風景鑑賞であり、視対象となっているのは沖縄島最北端に位置する石灰岩の海岸景観である。

次いで利用が多いのは国頭村の大石林山であり、年間約6.3万人程度の入込客数があり、ピーク時には500人/日程度の利用者があるものと推定され、利用形態としては石灰岩の特徴的な風景鑑賞である。

東村のふれあいヒルギ公園における年間入込客数の総数は10万人弱と大石林山よりも多いが、一般観光の割合は年々減少傾向にあり、平成27年時点では入込総数の約4割程度となっていることから、マングローブ林内の散策・観賞を目的とした実質的な一般観光客数は4万人弱にとどまっているものと推定される。ふれあいヒルギ公園における残りの6割の利用者についてはエコツアーや修学旅行客であり、一般観光客とエコツアー利用者等が混在している状況にある。

同様に年間3万人程度の入込客数がある国頭村の比地大滝についても、エコツアーやキャンプを目的として訪れている利用者多く、マストツアーとエコツアーとが混在している状況にあり、国頭村森林公園、東村のつつじエコパークについても同様の傾向にあるものと想定される。また、国頭村森林公園やつつじエコパークではトレイルランニング大会やつつじ祭りなど各種イベントが開催されており、イベント期間中には1日最大2,000人程度の利用集中がみられる。

沖縄島北部3村を訪れる観光客の立ち寄り地として機能している施設としては、各村にそれぞれ整備されている道の駅があり、平成27年では、道の駅ゆいゆい国頭が約10.5万人/年、道の駅おおぎみが約8.9万人、サンライズひがしが約7.6万人/年が利用している。平成28年に

は新たに、国頭村の道の駅ゆいゆい国頭に隣接して「やんばる3村観光連携拠点施設」が整備され、観光案内機能の充実も図られつつある。

また、国頭村にはやんばる野生生物保護センターとヤンバルクイナ生態展示学習施設があり、沖縄島北部の自然の解説や象徴的生き物であるヤンバルクイナの生態展示が行われているが、利用者はいずれも1.3万人程度にとどまっている。

世界自然遺産登録に伴って急激に増加するのは大半がマスツアー観光であるが、現在の沖縄島北部でのマスツアー観光の最大の受皿は辺戸岬であり、世界自然遺産の価値とされている沖縄島北部の森の生物や生態系を体感できる拠点ではない。したがって、今後は、世界自然遺産としての沖縄島北部の森の生物や生態系を求めて訪れる一般観光客を受け入れ、その魅力の一端を体感させ、保全の重要性に対する理解を促すことのできる拠点機能の確保が求められる。比地大滝、国頭森林公園、ふれあいヒルギ公園等の既存の利用拠点の機能強化も含め、今後の新たな拠点機能の確保に向けた検討が必要である。

沖縄島北部での世界自然遺産の価値を象徴するヤンバルクイナに対しては、これまで以上に観光客の興味や関心が高まることが予想されるが、現状のやんばる野生生物保護センターとヤンバルクイナ生態展示学習施設では、施設規模が比較的小さく、主要なアクセスルートから離れているなど、現状ではマスツアー観光の受皿とはなり難い状況にある。また、沖縄島北部全域を包括し、観光だけでなく世界自然遺産や国立公園に関する様々な情報を提供する総合的なインフォメーション機能の確保も必要となる。

なお、世界自然遺産登録後には、世界遺産地域である沖縄島北部を目的として来訪する県外観光客が増加することから、沖縄島北部での滞在時間や宿泊者の増加が見込まれるため、現状における宿泊収容力が不足する可能性が高い。

### 5-1-2 自然体験型のエコツアー利用の現状と課題

自然体験型のエコツアー利用者は個人客（小グループを含む）である場合が多いが、沖縄島北部では一部の修学旅行等を除き、宿泊率やガイド利用率が比較的低い傾向にある。これは、エコツアー利用においても県内（中南部）からのリピーターの割合が多いことと、県外客においても中南部に宿泊して沖縄島北部を訪れる場合が多いことによるものと思われる。また、利用形態としてはカヌーやカヤック、トレッキング、キャニオニング（沢歩き）の他、生物観察、星空観察等が行われている。

沖縄島北部のエコツアーフィールドのうち、最も利用が多いのは大宜味村のター滝と東村のふれあいヒルギ公園であり、年間入込客数は7～6万人程度である。ふれあいヒルギ公園ではカヌー利用が中心で大半はガイド付きの利用であるのに対し、ター滝では大半がセルフガイドでキャニオニング（沢歩き）が行われている。次に利用が多いのは国頭村のやんばる学びの森で年間2.2万人程度、国頭村の比地大滝、国頭森林公園、与那覇岳でのトレッキングや自然観察利用は年間数千人程度、国頭村の伊部岳、大宜味村の石灰岩の森やイギミハキンゾーでのトレッキングは年間数百人程度と推定される。上記以外にも、様々な河川や海岸、山林や林道・歩道等において多様な自然利用が行われているが、実態の把握できていないのが現状である。

現在利用されているエコツアーフィールドの大半は世界自然遺産の緩衝地帯及び周辺地域であるが、与那覇岳、伊部岳等の一部のフィールドは推薦地内に位置している。世界自然遺産への登録を契機として、自然体験型のエコツアー利用に対する需要が高まる可能性が高いことから、より原生的な自然を求めてエコツアーフィールドの拡散・増加がさらに加速することも懸念される。また、今後はヤンバルクイナの観察を目的とした集落内や林道での利用ニーズが高まることも予想される。

現在、沖縄島北部3村の森林におけるエコツアーガイド利用のあり方については、沖縄県森林管理課と3村の連携により「やんばる型森林ツーリズム推進体制構築構築事業」において検討

が進められている。これらの検討を通じて、エコツアーフィールドとして利用する場所の選定やルールの設定、ガイドの登録や人材育成、利用に伴う影響のモニタリングや評価手法の検討等が行われているが、それらの検討に加えて、利用するフィールドでの影響・負荷低減のために最低限必要な施設整備、利用者への情報提供・普及啓発等の機能確保についての検討が必要である。

### 5-1-3 歴史文化体験型の観光の現状と課題

やんばる地域の人口は現在約1万人程度であり、自然とともに生きてきた個性豊かな地域の文化が集落地域に色濃く残され、地域ごとの伝統的な風習や祭りが継承されている。海と山に囲まれた沖縄島北部の集落では、海と山を一体として捉え、一つの空間から自然の恵みを受けているという空間認識が見られる。それを特徴づけるのが祭祀で、集落の邪気を払い豊作・豊漁を祈願するシヌグや海神（ウンジャミ・ウンガミ）祭などはこれを象徴的に表している。このような祭祀は集落の伝統として受け継がれ、国頭村安田のシヌグ、大宜味村塩屋湾のウンガミが国指定重要無形民俗文化財に指定されている。

また、沖縄島北部の生活・文化の学習拠点としては東村の「山と水の生活博物館」や大宜味村の「芭蕉布会館」などがあり、地元の小中学生を対象とした環境教育や文化教育も盛んに行われている。

沖縄島北部において現在行われている歴史・文化資源を活用した観光としては、塩屋湾の海神祭り（ウンガミ）や安田のシヌグ、辺戸お水取り行事などに代表される伝統行事の見学があり、利用者数は年間数百～2千人前後と推定される。また、一部の集落では集落散策等がイベント的に実施されているが利用者数に関するデータは入手できていない。

沖縄島北部においては多くの歴史文化資源が存在するものの、それらを活用した観光は現時点ではそれほど盛んに行われている状況にはない。今後は、包括的管理計画で示されているような自然のひとの共生の歴史文化を通じて、島の魅力を来訪者に伝えていくための施設や機能の確保、サービスの提供についても検討が必要である。

## 5-2 利用者ニーズからみた課題

来訪者のニーズとしては、沖縄島北部3村の魅力である豊かな自然を守ることは重要としながらも、宿泊施設、飲食施設、案内・情報提供施設、公衆トイレ・シャワー等の便益施設等、快適に観光を楽しむための、基本的な施設の整備が望まれている。

この内、宿泊施設に関しては、国頭村に比較的規模の大きなリゾートホテル等の宿泊施設があるものの、全体としては小規模な施設が多く、全体としても宿泊収容力が小さいことから、現状においても宿泊率が低く、通過型の観光が主体となっている。

一方、案内・情報提供施設については、「やんばる野生生物保護センター（ウフギー自然館）」や「ヤンバルクイナ生態展示学習施設（くいなの森）」、「芭蕉布会館」などがあるが、その存在が十分認知されていないことが推察された。

情報提供機能の強化にあたっては、案内板や道標等のハード整備とともに、パンフレットやマップ等のソフト整備も求められている。今後はやんばる国立公園の新規指定を受けて、国立公園の入口標識の整備が各所で実施される他、3村がそれぞれ個別に必要な施設の整備を進めていくことが想定されるが、外部からの利用者にとっては、国立公園及び世界自然遺産地域として沖縄島北部は一体的にとらえられることから、案内サイン等の設置に関しては、関係行政機関が連携することにより、統一的なデザインの採用や効果的な配置の検討が必要となる。

また、適正利用を念頭においた沖縄島北部の観光利用の展開として、“やんばる型観光として商品化”し、3村が連携して取り扱えるようにすることも効果的ではないかとの有識者からの助言を得ている。

### 5-3 世界自然遺産の保全・管理の観点からみた課題

包括的管理計画においては、世界自然遺産としての管理体制を整えるうえで、『情報発信と普及啓発』の重要性に鑑み、以下のような方針が示されている。

計画対象区域を訪れる来訪者に対する情報提供と教育・解説プログラム提供のための手段としては、ガイドによる説明、既存の関連施設等の活用を積極的に進めるとともに、必要に応じて新たに世界遺産センターの整備を検討する。

また、沖縄島北部3村では、集落内の飼い猫については、マイクロチップの埋込や登録の義務化など、各村において条例等を制定し、飼養管理を行っているが、集落外の野良猫に関しては管理が困難であり、ヤンバルクイナ等の希少野生鳥獣保護上の脅威となっている。さらに、近年では、捨て犬等の野犬化と群れ化による徘徊が大きな課題となっており、ヤンバルクイナ、ケナガネズミなどの希少野生鳥獣が噛み殺される事例が報告されるとともに、住民や観光客が襲われそうになるなど、生活・観光面での影響も出始めている。

そのため、沖縄島北部行動計画にも示されているとおり、所有者のいないネコ・イヌの保護収容・譲渡施設の整備・運営の必要性が指摘されており、以下のような取組みを実施することとしている。

所有者のいないネコ及びイヌについて、保護と飼養、譲渡先への引き渡しという一連の取組の実施が可能な施設の整備や体制の構築に取り組む。また、この施設においては、子供たちと動物とのふれあいなど、教育面での活用等についても検討する。

なお、沖縄島北部は、アクセスルートやアクセスポイントが多く、利用者のコントロールが難しいことから、ビューポイントや利用可能フィールド、利用禁止フィールドの設定や利用ルールを明確にすることが重要である。また、上記の野良犬・野良猫の問題などは県民が原因であり、県民向けのマナーの徹底や利用ルールについての意識啓発も重要であり、そのためにも、拠点となるビジターセンター等に立ち寄り、そこで必要なガイダンスを受けられるような仕組みを確立するとともに、ガイダンスを受けることのメリットやインセンティブについて、観光客に周知することも必要であるとの有識者からの指摘・助言を受けている。

世界自然遺産としての保全・管理の観点からは、上記のように情報発信や普及啓発のための効果的な施設や機能の確保及び所有者のいないネコ・イヌの保護収容・譲渡施設の整備に関する検討が必要とされている。



**問6 今回の旅行で不満などを感じたことについて、当てはまるものに○をつけてください。(複数回答可)**

1. やんばる地域の自然や文化の情報発信施設（ビジターセンター）が少ない 2. やんばる地域の珍しい動植物と触れ合える施設が少ない 3. やんばる地域の伝統文化の体験施設が少ない 4. 遊歩道・登山道が未整備・壊れていた 5. 解説板・案内板が少ない 6. 公衆トイレが少ない・汚い 7. 駐車場が少ない 8. 展望施設が少ない 9. 飲食施設が少ない 10. 宿泊施設が少ない 11. 特産品等の物販施設が少ない 12. 特に施設に関する不満は無かった 13. やんばる地域には施設はできるだけないほうが良い 14. その他（ ）

**問7 やんばる地域にまた来たいと思いますか？**

1. ぜひ来たい 2. できれば来たい 3. 来たいと思わない 4. わからない

**問8 問7で「また来たい」と回答された方は、次回の訪問ではどこに行きたいですか？ 当てはまる場所に○をつけてください。(複数回答可) ※別紙の地図も参考にしてください。**

1. 道の駅ゆいゆい国頭 2. 辺戸岬 3. 大石林山 4. 茅打ちバンタ 5. 奥ヤンバルの里 6. ヤンバルクイナ生態展示学習施設（クイナの森） 7. やんばる学びの森 8. 国頭村森林公園 9. 与那覇岳 10. やんばる野生生物保護センター（ウフギー自然館） 11. 比地大滝（キャンプ場） 12. 村立芭蕉布会館 13. 道の駅おおぞみ 14. ター滝 15. 石灰岩の森と山の散策道（猪垣） 16. 慶佐次のヒルギ林（ふれあいヒルギ園） 17. つつじエコパーク 18. 福地川海浜公園 19. 山と水的生活博物館 20. サンライズひがし 21. その他（ ）

**問9 今回の旅行で「道の駅ゆいゆい国頭」、「道の駅おおぞみ」、「サンライズひがし」で、土産物や地域の物産等の買い物されましたか？**

1. した 2. しなかった

**問10 やんばる地域が国立公園であることや世界自然遺産登録を目指していることをご存知ですか？ 当てはまるもの一つに○をつけてください。**

1. 国立公園であることも世界自然遺産登録を目指していることも知っている  
2. 国立公園であることは知っている 3. 世界自然遺産登録を目指していることは知っている  
4. 国立公園であることも世界自然遺産登録を目指していることも知らなかった。

**問11 その他、やんばる地域の自然等を活用した持続的な観光について、ご意見等自由にご記入ください。**

自由記述：

**◆最後にアンケートを記入された方について教えてください**

性別	1. 男性 2. 女性
年齢	1. 10歳代 2. 20歳代 3. 30歳代 4. 40歳代 5. 50歳代 6. 60歳代 7. 70歳以上
居住地	1. 沖縄県内（ ）市町村） 2. 沖縄県外（ ）都道府県） 3. 海外（ ）国）
これまでにやんばる地域を何度訪れましたか。当てはまるものに○をお付け下さい。 ※国頭村、大宜味村、東村在住の方は回答不要	
1. 初めて 2. 2回目 3. 3回以上	

**◆旅行形態について教えてください**

同伴者の有無及び関係	1. 一人旅 2. 夫婦 3. 家族・親戚 4. 友人（2人～3人） 5. 少人数グループ（4～6人） 6. 大人数グループ（7人以上）
やんばる地域での滞在日数	宿泊（ ）泊
滞在中にガイドやインストラクターを利用しますか	1. 利用する 2. 利用しない

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。